

主の祈り

(定価 3,200 円)
本体 3,107 円)

1991年8月10日 初版第1刷発行

訳者 山田経三

発行者 中村義治

発行所 株式会社 教文館

東京都中央区銀座4-5-1 振替・東京2-11357 電話 (3561) 5549

印刷所 安信印刷 株式会社

製本所 日進堂製本 株式会社

配給元 日キ販 東京都新宿区新小川町9-1 振替・東京3-90976

電話 (3260)5670 ISBN 4-7642-6274-6 Printed in Japan

© 1991 落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

〈著者・訳者紹介〉

著者

レオナルド・ボフ (Leonardo Boff)

1938年12月14日、ブラジル南部サンタカタリナ州に生まれる。フランシスコ会入会后、現在教授を務めるペトロポリスの神学校で哲学と神学を学ぶ。1964年司祭叙階後、ドイツのビュルツブルク大学、ベルギーのルーヴァンカトリック大学、イングランドのオクスフォード大学の神学博士課程で学ぶ。1965～1970年、ミュンヘン大学でカール・ラーナーに師事し、1972年神学博士号を取得。G. グティエレスと共に、解放の神学者として、現在大いに活躍している。

著書は『教会・カリスマと権力』『アシジの貧者・解放の神学』（エンデルレ書店）“Jesus Christ Liberator” “Liberating Grace” “Ecclesiology: The Base Communities Reinvent the Church” “Passion of Christ, Passion of the World” “The way of the Cross: Way of Justice” など多数。

訳者

山田経三（やまだ・けいぞう）

1936年神戸に生まれる。上智大学大学院経済学博士課程終了。現在、カトリック司祭、上智大学教授。同社会正義研究所、イエズス会社会司牧委員会、日本平和学会、組織学会、カトリック正義と平和協議会等の活動をとおりてアジア諸国との草の根レベルの交流を促進。

著書は『経営組織とリーダーシップ』『解放の神学と日本』『解放の神学が問いかけるもの』『現代世界における解放の神学』

訳書は『解放の神学』『経済の倫理』『真の開発とは』『ヨブ記』など。

日本の皆さまへのメッセージ

ブラジルには日本人の二世、三世がたくさん居ます。私の妹は日系二世と結婚し、三人の混血の子供が居ます。ブラジルでは、日本人の子孫たちはみな勤勉で新しい生活状況に積極的に適応していくというよい評価を得ています。私個人として日本の禅、仏教に対して強い興味を持っています。そこには西洋のギリシャ的人間観よりも、総合的で精神的な人間像がみられます。日本の文化の精神的エネルギーから私たちは多くのことを学ぶことができます。

アッシジの聖フランシスコについて本を書きました時、私は彼の優しさと力強さを強調しました。その時、日本の哲学についてよく考えました。日本の哲学には非常に繊細な感覚、優しさと力強さ、一貫性が見事に調和していると思います。私の考えでは、日本が私たちに教えてくれるいま一つのことは、科学的精神と大自然の調和との統合、人間の努力と神の恵みとの統合であります。

キリストと日本文化の出会いによって、日本の先達の靈性につねに伴っていた洞察がいっそ

O pai-nosso : a oração da libertação integral,

by Leonard Boff

© 1979 by Editora Vozes Ltda, Brazil

Japanese translation Copyright © 1991 by KYO BUN KWAN, Tokyo

う深まっていくことでありましょう。この出会いのために、私のこの本が少しでもお役に立つことができれば、これ以上の幸いはありません。

どうか日本の皆さまの上に、神様の恵み、祝福が豊かにありますように。

ブラジル、ペトロポリスにて

レオナルド・ボフ

一九九〇年五月三日

目次

日本の皆さまへのメッセージ	一
第一章 完全なる解放の祈り	九
受肉の原理	二
神学主義でも世俗主義でもなく	三
主の祈りの各節について	六
第二章 真の意味で主の祈りを唱える	三
切り裂かれた世界の血管、それは被造物の苦しみ（ロマ八22）	六
わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。だれがわたしを救ってくれるでし ようか？（ロマ七24）	七
被造物は切に待ち望んでいます（ロマ八19）	六
反抗	九
あきらめ	三
ひたすらなる希望	三

暗闇に住む民は大きな光を見た（マタ四16）……………三
イエスと聖霊に教えられ、わたしたちは「アツバ、父よ」
（ガラ四6）と唱えます……………三

第三章 天におられるわたしたちの父よ……………四

御父としての神の体験の普遍性……………五

「アツバ」——イエスの体験の新しさ……………六

父なる神——近く、それでもなお遠い存在……………六

天におられる……………六

父不在の世界でどのように主の祈りを祈るべきか……………七

第四章 御名が崇められますように……………八

嘆願の叫び……………九

「崇める」と「御名」の意味するところ……………九

解放的神聖化……………九

第五章 御国が来ますように……………一〇

最も気高く、最も深遠な人間の本性……………一〇

「あなたがたのしているものを見る目は幸いだ」

（ルカ一〇23）……………一一

神の国は近づいている……………一二

第六章 御心が行われますように……………一三

神の意志とは何か？……………一三

天におけるように地の上にも……………一四

第七章 わたしたちに必要な糧を今日与えてください……………一五

「糧」（パン）——物質の聖なる側面……………一五

「わたしたちの」に含まれた意味の重さ——幸福の秘密……………一五

「今日の」——毎日のための、そして永遠のためのパン……………一六

「今日与えてください」——人間の労働と神の摂理……………一六

パンの神聖さ……………一七

第八章 わたしたちの負い目を赦してください……………一七

罪の体験と負い目……………一七

わたしたちの負い目を赦して下さい……………一八

わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように……………一八

第九章 わたしたちを誘惑に遭わせないでください……………一九

人間——誘惑（試練）に遭う存在……………二〇

人間の本性——脆さ・はかなさ……………二〇五

イエスが試みを受けたので、誘惑に遭う人間を救うことができる……………二一〇

主よ、わたしたちを大きな誘惑から救ってください！……………二二三

第二十章 悪い者から救ってください……………二三四

状況としての悪……………二三九

悪の具体的表現……………二三六

イエスそして悪への勝利……………三三六

人間の心の決定的な叫び——父よ、わたしたちを救って……………三三九

ください！……………三四

第二十一章 アーメン……………三三九

注……………三三九

訳者あとがき……………三三九

参考文献……………二七一

聖書・人名索引……………一

装幀 熊谷博人

凡例

一、聖書の略語は左記のとおり。

創世記(創) 出エジプト記(出) レビ記(レビ) 民数記(民) 申命記(申) 士師記(士) サムエル記上(サム上) サムエル記下(サム下) 列王記上(王上) 歴代誌上(代上)
マタイによる福音書(マタ) マルコによる福音書(マコ) ルカによる福音書(ルカ) ヨハネによる福音書(ヨハ) 使徒言行録(使) ローマの信徒への手紙(ロマ) コリントの信徒への手紙一(一コリ) コリントの信徒への手紙二(二コリ) ガラテヤの信徒への手紙(ガラ) エフェソの信徒への手紙(エフェ) フィリピの信徒への手紙(フィリ) コロサイの信徒への手紙(コロ) テサロニケの信徒への手紙一(一テサ) テサロニケの信徒への手紙二(二テサ) テモテへの手紙一(一テモ) ヘブライ人への手紙(ヘブ) ヤコブの手紙(ヤコ) ペトロの手紙一(一ペト) ペトロの手紙二(二ペト) ヨハネの手紙一(一ヨハ) ヨハネの手紙二(二ヨハ) ヨハネの黙示録(黙)

第一章 完全なる解放の祈り

靈的に豊かな先師が、かつて次のように述べた。

「わたしが愛を持たなくなったら、あるいは正義にかなう行動をおこなわなくなったら、ああ、神よ、それはわたしがあなたの側から離れたということです。そしてわたしの信仰が単なる偶像崇拜に堕したということです」

「あなたを信じるために、わたしは愛を信じなければなりません。そして正義を信じなければなりません。愛と正義を信じるということは、御名を唱えるのに比べてはるかに大切なことです」

「愛と正義がなかったら、誰にしろ、いつにしろ、あなたと接するのは不可能です」

「しかし、愛と正義を自らの道しるべとする者たちは、あなたの許にいたる真正な道をたどっているということです」

受肉（イエス・キリストを通しての神の顕現）は、キリスト教信仰の中心的な神秘のひとつであるという以上のものである。すなわちここには、現実を新しく理解する道が開かれているのである。別な言い方をするなら、受肉とは、神的なものと人間的なものが相互的に存在していることであり、歴史的存在と永遠の存在が相互に透入していることである。この各々の存在は固有のアイデンティティを維持しながら、同時に新しい現実である相手の中に入りこむ。

人間であり、同時に神であったイエス・キリストは、現実存在として典型的かつ最高位の受肉であった。この、常軌を逸した斬新さを理解するためには、ギリシア思想の二つの主要要素である超トランスセンデンス越イニマニネスの概念と内在の概念を動員するだけでは十分とはいえない。この概念の導入によって把握されるのは、二つの次元における相違、すなわち人間的なものは神的なものではなく、神的なものは人間的なものではない、という事柄だけである。だからここでは両存在の共存ということを説明し得ないし、両者が一つの融合体、同一のものであるということを説明する術をもたないのである。

われわれはそこで、第三のカテゴリーを立てる必要に迫られる。すなわち、透過トランスプレシの概念である。このカテゴリーを立てることによって、われわれは内在の中における超越の存在を明示することができる。人間存在において、神的存在は実現の道を見出し、神的存在は同時に人間存在を変貌させるのである。最も重要なことは、ここに新しい現実存在が現われたことで

あり、それは一体になったが、同時に緊張をはらんでいる。というのも、このものは、異なる性質を持つ二つの「異なるもの」によって構成されているからである。⁽¹⁾

受肉の原理

キリスト教とは、長きにわたる神の受肉のプロセスであると理解することができる。御子はすべての存在を解放するために、すべてを自らの内に引き受けられたが、ちょうどそのようにキリスト教信仰も、すべてのものを変貌させるために、すべてのものにおいて受肉することを求めている。この意味において、われわれは次のように言うことができる。すべてのものは神の国に属している。なぜならすべてのものが客観的に神とつながっており、名実ともに神の国に属するよう呼びかけられているからであると。ゆえにキリスト教信仰は、靈的また超自然的と描写されるものにも、同様に価値を置いている。神の受肉によって、神的なものが人間的なものに浸透し、人間的なものが神的なものに参入するという、以上のことがらは、全て同じ一つの計画に属しているのである。

こうした理解を背景として、キリスト教共同体は、人間の魂の解放だけでなく、人間の完全な解放のために関与している。そのための有形的存在ですら（ここでは具体的に経済的、社会的、政治的、文化的下部構造を指す）、神の受肉を通じて絶対的に実現されるよう呼び出され、父の王国の一部となるのである。それゆえにキリスト教共同体は、近年その傾向を一層顕著にしているところであるが、抑圧されている人びと、つまり「生活を脅かされ、飢えや長びく病い、無教育や貧困など」を余儀なくされている人びとの解放に、力を入れている。

教会は、教皇パウロ六世が表明したように、そしてプエブラ会議で再確認されたように「教会自身の大勢のこどもたちを含む、何百万もの人間の解放をおこなうと宣言する義務があり、同時に、この解放が世界中で進行するように手を貸す義務、その解放の推移に目をこらす義務、それが完全なものであるかどうかを確かめる義務を負っている。こうした尽力のいずれも、福音宣教とかけ離れたものでは全くない」のである（プエブラ二六項、「福音宣教」三〇項⁽²⁾）。教会は、こうした世俗の努力に深く関与している。というのも教会は、世俗的なものが神の恵みによって、また神の国の十分な実現によって、浸透されなければならないことを知っているからである。世俗的なものは、透明になり、神聖になるであろう。ある詩人がいみじくもこう歌っている。「おお、道路掃除人よ、あなたは道を清掃しながら、天国を清めている」（D・マルコス・バルボース）。

神学主義でも世俗主義でもなく

教皇パウロ六世の使徒書簡「福音宣教」（一九七五年）により、またプエブラ司教会議（一九七九年）によって、二つの危険が指摘され、注意が促された。その第一は、宗教的還元主義（神学主義）である。宗教的還元主義Ⅱ神学主義は、キリスト教信仰ならびに教会の活動を、厳格に宗教上の領域に、すなわち礼拝や信心、教義の分野にのみ限定する。しかし教皇パウロ六世は明確に、「教会は、その使命を宗教活動分野に限ろうとするものではないし、人間の世俗的諸問題から離れて立とうとするものではない」（「福音宣教」三四項）と発言している。プエブラ会議は端的に、次のように宣言している。「キリスト教は、政治を含む人間生活のあらゆる分野に福音を伝えると期待されている。それゆえに教会は、信仰の範囲を、個人生活あるいは家庭生活に限る者を、すなわち仕事上の問題、経済問題、社会問題、政治問題を、あたかも罪や愛や祈りや許しなどと無関係のものであるかのように信仰から除外する者、除外しようとする者を批判する」（プエブラ五一五項）。

ここで強調されているのは、キリスト教というものが、現実世界の一分野（宗教的分野）と

して理解されるのではなく、一つのプロセスとして、すなわち現実世界のすべてが贖われ、神の国の一部となるように受肉化されるプロセスとして理解されなければならないということである。キリスト教信仰は真摯であり、救済的でなければならない。この信仰が愛の形をとるときそれは救済的となり、そしてその結果として真摯なものとなる。そして、われわれを救いの入口にまでいざなう愛は、決して議論や解説などではなく、実行であり実践である。愛の実践と共存する信仰のみが、信仰の名に値する信仰といえることができる。その目的とするところは、キリスト教信仰を人間生活の他の現実と一本にまとめることである。

第二にあげられる危険は、政治的還元主義（世俗主義）である。これは、キリスト教信仰の、そして教会の関与すべき事柄を、厳密に政治的分野に限ることを要求する。すなわち教会の使命を「純粹に世俗の計画の次元に還元しようとする。その目的は人間中心の目標点に還元されるであろう。使者の役割を担う教会の救済が物質的豊かさに還元されるのである。全ての精神的、宗教的熱情をなおざりにするならその活動は、政治的、社会的秩序の先導役を果たすのみのものとなる」（「福音宣教」三二項、またプエブラ四八三項参照）。

キリスト教信仰は、社会に目を向けた側面を持つてはいるが、その要素がキリスト教信仰のすべてでは決してない。原初的な意味において、キリスト教信仰の視野は来世を向いている。その視野から、政治的活動を黙想し、社会的活動に命を吹き込むのである。歴史の、ある地点

に立ち、そこからキリスト教信仰は、歴史自らが達成し得ない救済を宣言し、それへの関心に対する呼びかけをおこなう。その救済は完全なものであり、完全な自由を生み出す——そしてこの完全な自由はすでに、地上のこの場所が始まっているのである。

ところが二種類の還元主義は、神の受肉の過程が明らかにあって歴史と結びつくことを妨げる。われわれに必要なのは、この相反する二元論を乗り越え、正しい統合、すなわち人間の解放とイエス・キリストの救いとを結びつけるのに適した道を確立することである（「福音宣教」三五項、プエブラ四八五項参照）。「教会はつねに、キリスト者の解放のための闘いを、教会自身⁽³⁾が宣言している人類の救済という普遍的計画に組み入れるよう努力している」（「福音宣教」三八項、プエブラ四八三項参照）。

歴史とキリスト教信仰という前提を立てたのはひとつにはそこで完全な解放が目指されるということであり、また他方では肉体と霊魂、個人的なものと集団的なもの、歴史と超越など、人間生活のあらゆる側面がここに包含されるからである。精神を志向するものであれ、物質世界に照準を合わせるものであれ、還元主義はいずれも、人類の一致、造物主のユニークな計画、イエスによる神の国宣言の中心的リアリティ——これは創造物を全体的に受け入れる——を正当に扱わないであろう。

主の祈りの各節について

主の祈りを実際に祈る中でわれわれは、神と人間の正しい関係、天国と地上の、また信仰と政治の間の正しい関係を得る。——それぞれの要素の統一性は保たれている。まず最初の部分は、御父、聖なる御名の維持、神の国、その聖なる意志である。二番目は日々の糧、許し、常に在る誘惑、常に脅威を与える悪といった人間の側の利害に関わっている。

この二つの部分で、イエスの祈りが構成されている。神は自らに所属するもの、すなわちその御名、神の国、その聖なる意志、といったものにのみ関心を持っているわけではない。われわれ人間の事がら、すなわち日々の糧、許し、誘惑、悪にも関心を払われている。同様にわれわれも、日々の糧、許し、誘惑、悪といった我々にとって肝要な事柄のみに心を奪われているわけではなく、それらと合わせて、御名の聖化、神の国の到来、神の意志の実現といった、神の関心事にも開かれている。

イエスの祈りにおいて、神の関心事は人間の関心事と無縁ではないし、人間の関心事は神の関心事と相入れないものではない。人間が天に向かい、神に嘆願を發する推進力は、はね返ってこの地上に戻り、地上の問題に影響力を及ぼす。それはすべて、一つの運動であり、深遠な統一体として發展する。まさにこうした相互の必要が主の祈りに見出される天と地の浸透を生み出すのである。

神が統一するもの——それは、われわれの神への関心とわれわれ自身の必要物についての関心である——は何人をも隔絶された状態に放置しはしない。神が地上の必要物のためにそむかれることがあってはならないが、かと言って神の中に見出される莊嚴さゆえに、われわれ有限なる地上の存在がのろわれてよいはずはない。この両者は二つながら、祈り、嘆願、賛美の素材となっている。それゆえにわれわれは、主の祈りを完全なる解放の祈りとみなすのである。

主の祈りが含むことがらは、決して美しい絵ではない。むしろ、激しい矛盾を表わした絵なのである。ここでは神の王国とサタンの王国がしのぎを削っている。御父は近くにおられる（彼はわれらの父である）が、同時に遠くに（天国に）居られる。この世では数多くの神を汚すことが發せられている。それゆえにわれわれには、神の名を聖とする義務が課せられている。この世はあらゆる種類の悪、不正に支配されているがために、われわれは、神の国の到来を、すなわち正義、愛、平和の国の到来を、ますます強く願うようになっている。また、神の意志は冒瀆を受けるばかりであり、それに対してわれわれは神の意志を具体的に行わなければならない。われわれは、毎日の生きる糧を求めて祈りをささげる。満身に食べ物が得られない

人びとが大勢いるからである。われわれは人々との共同の交わりを破っているが、神にそれを許されるようお願いする。そのことによってわれわれは、われわれを傷つけ、そこなう者たちを許すことができるからである。われわれはまた、誘惑をはねつけるだけの力が与えられるように祈る。その力がなければ、われわれは惨めな境遇に落ちるしかないからである。さらにわれわれは、悪から解放されるようにと必死の叫びをあげる。さもなければ信仰に永遠に背を向けるであろうからである。そして主の祈りは、この激しいせめぎ合いのさなかで、喜びに満ちた自信の光、穏やかな約束の光を放ち続ける。というのもこうした事態はすべて、われわれと御父との出会いのもとに完結するからである。

仔細に観察すれば分かるところであるが、主の祈りは、あらゆる時代のあらゆる人間について、その私的また、社会的存在に関わる主要な問題の数々をとりあげている。ここでは教会のことは何も言及されていないし、イエスのことばや彼の死、復活についてすら語られない。舞台の中心に神が立ち、その舞台のもう一つの中心には、人間性とその生に必要なものが集中している。ここに重点がある。その他のものはすべて、付随するものや解釈であり、それは要するに不可欠なものに添えられているものである。「神の偉大なるものを求めなさい。そうすれば神は同時に、小さく、ささいなものも下さるであろう」——これは、新約聖書以外のテキスト、すなわちアレキサンドリアのクレメンス（紀元一四〇―二二一年）が残した文献に、イエ

スが述べたとして伝えられていることばである。⁽⁴⁾ここにわれわれの注目すべき重要な教訓がある。すなわちわれわれは、自らに課した固定的な枠を越えて心を開かなければならないし、自らの限界を破って世界を広げなければならない。そうすることによって、何が不可欠なものであるか、それが見えてくる。すでにそれは、イエスによって、彼がわれわれに教えた祈り、主の祈りに非常によく表わされているのである。

祈願の内容、嘆願事項の序列は、恣意的なものではない。それは神に発し、そしてわれわれのもとに手渡されている。われわれが、身の回りで不足するもの、必要とされるのに満たされないものに関心をもつというのも、まず神から始まり、神からそれが送り出されているからである。われわれはわれわれで、苦しみのさなかにあつて、神に大きな関心を抱かなければならない。天上の苦しみと現世の苦しみは、共に結び合わさっているのである。

キリスト者の立場からするなら、いかなる解放も、それが真実の解放である限り、神との深い出会い、それがわれわれに関心を抱かせ、そして行動へと突き動かす出会いがなければ、始まることはない。神は間断なく「行け！」と語りかけていらっしやる。しかしその声がわれわれの耳に届くのは、この出会いの瞬間のみである。またわれわれは同時に、他の人びとによる正義、愛の行いに揺り動かされ、真実の正義、最高の愛としての神のもとに連れてゆかれるが、その時にもまた「来なさい！」とおっしゃる御父の声をしっかりと聞く。あらゆる行為、

行動の立て役者である神の確認なくして、いかなる解放のプロセスもその目的を達成することはできないし、目標地点に到達するのは不可能である。われわれは主の祈りにおいて、このうまく噛み合った関係に間違いなく出会うことができる。イエスのメッセージの本質である主の祈りが、教義のことばとして形成されず、祈りの形で提示されているのには、そうしなければならぬ十分な理由があったのである。

われわれが主の祈りについて、神学的で霊的な思索をおこなおうとすると、三段階にわたる解釈問題について吟味をおこなない、これを解決し、統合する作業をおこなうよう強いられる。まず第一のレベルにあるのは、歴史的イエスに関わる解釈問題で、それは、イエス自身は自分の語ったことばにどのような意味を込めたのかという問題であり、彼の祈りにはどのような意味が含まれているのかという問題である。ごく初期の段階から、主の祈りはつねに、イエスのメッセージの、一種の要約でありつづけた。祈りの形でそれは彼の根本思想、根源的体験を表現している。この最初のレベルの問題を考察する場合、われわれはまず、聖書釈義の上で最も確かといえる研究成果のみを採用するという姿勢を堅持する必要がある。

第二のレベルの問題は、使徒時代の教会のあり方や当時の神学の解釈と深い関係をもつ問題である。主の祈りは、共同体による祈りと深い関係を持ちつつ、マタイによる福音書、ルカによる福音書に組み入れられていった。かつてのキリスト者たちは、どの集会の場においても、

主の祈りを念じ、そして自分たちの生活と関連のあるそのことば、表現に、独得の意味を与えていった。それは、彼らが編んだ福音書の編集の仕方にもあらわれているし、かれらがイエスのことばに与えた神学上の強調点にもうかがうことができる。ここにおいてわれわれは、新約聖書の全体的な神学の光のもとで、主の祈りを理解しようとする必要に迫られるのである。

ついに、われわれは、現代というこの時代に主の祈りを聞くに際して、この祈りをどう解釈するかという問題に辿りついた。今日、主の祈りを唱えるとき、われわれはそこに避け難く、われわれ自身の信仰共同体の関心事を読み取る。今日のキリスト者の共同体は、兄弟姉妹たちが常軌を逸した社会的不平等に悩み苦しむのを目のあたりにして、その解放に寄与する生を生きたいと思い、キリスト者としての信仰をそこに反映させたいと願っている。われわれは、完全な解放の完全な祈りとして主の祈りを体験しているのである。

主の祈りについて釈義や発言をおこなった教会関係者は、古今枚挙にいとまのないほどである。すなわちテルトゥリアヌス（一六〇～二二五年）、聖キプリアヌス（二〇〇～二五八年）、オリゲネス（一八五～二五三年）、エルサレムの聖キュリロス（三八六年没）、ニュッサの聖グレゴリウス（三九四年没）、ミラノの聖アンブロシウス（三三九～三九七年）、モプスエステイアのテオドルス（四二八年没）、聖アウグスティヌス（三五四～四三〇年）、そしてアッシジの

聖フランシスコ(一一八一—一二二六年)などである。⁽⁵⁾彼らの残した研究を読むと、彼らが自らの生を受けたその時代に典型的な抱負や念願、気がかりな問題に十分関わった上での考察として、主の祈りの注解に挑戦していることが見てとれる。

読むということは、読み返すことである——これ以上に自然なことではない。もしわれわれが過去から何かの意味を引き出そうとするなら、現在の観点からそこに息吹きを吹き込まなければ、目的を達することはできない。

このプロセスは何を学び、研究するにしても、一面の真理となっているわけであるが、もしこのプロセスを十分に理解するなら、われわれは、われわれのおこなう聖書釈義という作業の目ざすところとその限界を素直に受け入れることができるであろう。われわれが聖書釈義をおこなえば、それは当然、われわれの置かれた状況の中での論究ということになり、具体的には現代の抑圧と、それからの完全な解放を願う熱望とを反映した聖書釈義となるはずである。主の祈りを唱えるということは、その時代のことばを用いて、しかもわれわれ自身の生きている現実を思うということである。その結果、驚ろくべきことにわれわれは、自分自身がイエス・キリストの隣人であり、キリストと同じ時代に生きていることを発見するのである。

第二章 真の意味で主の祈りを唱える

われわれの近隣には、各地からの移住者が集まり、人口稠密居住区域を形成している。彼らは、よりよい生活を求め、あるいは何とか生活の手がかりをつかもうと、故郷を離れ都会へと流れ込んできた人びとである。働き口を見つけ次第彼らは働いた。骨身を削るようにならして働いた。しかし今もって、彼らの手には何も残ってはいない。この落差は彼らが雇い主にもうけさせてやったということにある。

彼らが生き続けようとするれば、どんな方法に頼ることになるであろうか？ 第一には、できる限り出費をおさえることである。彼らは大抵は豆を食べる。あるいは手に入れられれば、米やシーリアル(コーンフレークなどの穀物食品)、鶏卵などを、そして時おり、わずかばかりの鶏肉を口に入れる。その他の肉類は、彼らとはほとんど無縁の存在である。衣類や靴を購入するといった機会もほとんどない。ごく稀に少々値のはる商品を買うことがあっても、割賦販売による購入である。そうしても、彼らの周囲には豊かさのかけらも存在しな